

平成 19 年度
入学試験問題

国 語

2月2日 午前

受験番号	氏 名

中村中学校

□ 次の(1)～(10)の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みを答えて下さい。

- (1) 何よりもケンコウ第一だ。
- (2) 太陽の光をアびる。
- (3) 絶滅のキキにひんする動物。
- (4) キチヨウ品の管理に気をつける。
- (5) カブシキ会社を設立する。
- (6) 原因の究明に力をつくす。
- (7) 複雑な胸中を語る。
- (8) 仏だんに花を供える。
- (9) 実りのある討論会だった。
- (10) 今年の運勢をうらなう。

□ 次の慣用句が()内の意味になるように、ア～コからことばを選び、記号で

答えて下さい。

- 1 [A]をのむ (くやしさをがまんする。)
- [B]をのむ (思いがけないことにはっとする。)
- 2 [C]につく (職業などがその人にしっくり合う。)
- [D]につく (あきていやになる。)
- 3 [E]がきく (有名で特別扱いしてもらえる存在である。)
- [F]がきく (物のよしあしを見分ける力がすぐれている。)
- 4 [G]を打つ (対策を立てて物事を処理する。)
- [H]を打つ (感動する。)
- 5 [I]をかける (相手に本音を言わせるためにたくみにさそいかける。)
- [J]をかける (程度をいっそうはなはだしくする。)

ア、顔 イ、鼻 ウ、胸 エ、輪 オ、手
カ、息 キ、目 ク、涙 ケ、板 コ、鎌

③ 次の文章を読んで、後の問いに答えて下さい。

きのう、家族旅行から帰ってきました。おみやげをたくさん買ってきましたが、いつもお世話になっているおとなりの人にも、お菓子かしを買ってきました。そのお菓子はとても有名なお菓子で、あまくておいしいし、ねだんもけっこう高いのです。これを母がおとなりに持っていきました。そのとき母はこう言いました。

「あの、これ、たいへんつまらないものですけれど、ほんのお口よごしにどうぞ」

母はこのお菓子が、有名でおいしくて、ねだんが高いということを知っています。それでも「たいへんつまらないもの」と言ったのです。「ほんのお口よごしに」というのは、くわしく説明すると、「じっくり味わったりするようなごちそうではなくて、口をよごす程度の量のまずいものです」ということです。母はどうしてこんな言い方をするのでしょうか。わざとウソをついたのでしょうか。

今日、となりの奥さんおくと道で会いました。するととなりの奥さんはこんなあいさつをしてくれました。

「昨日きのうは、たいへんけっこうなお品をありがとうございました。家族全員でさっそくおいしくいただきました」

ちょっと皮肉な話ですが、私はとなりのご主人があまいものがにがてなのを知っています。だから「 A 「というのは、明らかにウソです。それでも、となりの奥さんおくはにこにこしていて、とてもウソをついているというふうには見えませんでした。」

① 外国人が日本人のこういう会話を聞いてふしぎに思うことは、どうしてこんなにくわがるようなウソを、おたがいにつくのだろうかということだそうです。おいしいとわかっているものを「つまらないもの」と言い、きれいなのに「おいしかった」と言うのは、たしかに正直ではありません。なぜ、正直に言わないのでしょうか。とてもふしぎです。

「これはとても有名で（ 1 ）お菓子なんです。ねだんもけっこう（ 2 ）かっ
たんです。でも、あなたのためにとくべつに買ってあげました」

「きのういただいたお菓子、私はとても（ 3 ）と思ったんですけれど、主人があ
まいものが（ 4 ）なので、あまり食べませんでした」

正直に言うところになりますね。正直に言わない場合と、正直に言った場合とで、ど
こがちがうでしょうか。

結局それは、言う側の気持ちではなく、言われる側の気持ちがちがうのです。言う
側は正直に言うほうがすっきりするかもしれませんが。ほんとうに高いお金を出して買っ
たものなら、「高かったんです」と言ったほうが、自分の気持ちとしてはすっきりす
るでしょう。

でも、言われたほうはどうでしょう。「そんなに高いものを悪いなあ」と思うんじゃ
ないでしょうか。「お返しをしないといけないかもしれない」と思うかもしれません。
それから「きらいだから食べませんでした」と言われたら、（ a ）相手のために買っ
てきてあげたのにとがっかりするでしょう。そして、よけいなことをしなければよかつ
たと、おみやげを買ってきたこと自体をこうかいしてしまうかもしれません。そうす
ると、つきからは（ b ）おみやげを買ってこなくなります。用がないかぎり気軽
に口をきく機会もへってしまうでしょう。悪くすると、おとなりの家とはこれから先、
（ c ）つきあいをしなくなってしまうかもしれません。

ほんとうのことを言ったために、相手を傷つけたり、それから先のつきあいがとだ
えてしまったりするのはとても残念です。それならば、（ d ）ウソをついても、
相手の気持ちを思いやって、相手の負担にならないように、相手がこうかいしないよ
うにと心をくばり、これから先もなかくつきあいをつづけていかれたほうがよいで
しょう。きっと、私たちの先祖はこんなふうを考えて、「つまらないもの」などとい
う言い方を発明してきたのだと思います。

相手のことをとてもよく知っている場合には、正直に言ったからといって、それか

ら先のつきあいがとだえてしまうなどということはないかもしれませんが。でも、相手のことをあまりよく知らなかったり、相手がおこらせたらまずい目上のえらい人だったりした場合には、とくにこれから先のつきあいをつづけていかれるかどうかということには、心をくばらなければなりません。相手をおこらせないためには、相手に敬意を表して持ちあげておくのがいちばんです。その反対に、自分のことはけんそんして下げておけば、まちがいはありません。

相手に関するものごとはすばらしいと持ちあげて表現し、自分に関するものごとはつまらないダメなものとかけんそんして言うのは、じつは日本語の敬語の大きな原則の一つになっています。敬語の中の「尊敬語」というのは、相手側のものごとや行動をすばらしいと持ちあげて言う表現ですし、「けんじょう語」というのは、自分側のものごとや行動をぜんぜんダメだとけんそんして言う表現のことです。

（浅田秀子「日本語にはどうして敬語が多いの？」）

問一 文中の空らん「A」にはどのような内容の文が入っていたと考えられますか。一五字以内で答えて下さい。

問二 文中の空らん（1）～（4）に入るのにふさわしい語を本文中からさがして答えて下さい。（同じ語を入れてもかまいません。）

問三 ——線①について、

(1) 外国人がおみやげを渡すわたときにはどのようなことを言って渡すと考えられますか。問二を参考にして具体的な会話の形で答えて下さい。

(2) 日本人はなぜすぐわかるようなウソをつくのですか。文中の語を使って説明して下さい。

問四 文中の空らん（a）～（d）に入る語を次から選び、記号で答えて下さい。

ア、あまり イ、もつとも ウ、せっかく エ、まず オ、たとえ

問五 次の①～⑤の——部の敬語について、尊敬語にはAを、けんじょう語にはBを解答らんに記入して下さい。

① あすは学校にまいります。

② 粗品そしなをさしあげます。

③ いらつしゃいませ。

④ お荷物、お持ちしますか。

⑤ 冷めないうちにめしあがれ。

問六 次のうち、本文の内容からみて正しいものには○を、そうではないものには×を解答らんに入力して下さい。

ア、これからの時代は高いものは高い、まずいものはまずい、とはつきり相手にわかるように伝えることが大事だ。

イ、日本の敬語においては、基本的に相手を持ち上げ、自分側のことは下げおけばまちがいない。

ウ、日本人は、内容がウソか正直かということよりも、相手との関係を重んじてきたと言うことができる。

エ、日本では旅行のおみやげといえば、やはりお菓子にするのが大勢の人に喜ばれるので最も適している。

オ、最近の日本ではおみやげのやりとりなどわずらわしいと感じている人も増えてきている。

四 次の文章を読んで、後の問いに答えて下さい。

「僕」の家族（妻→真理、長男→カズキ、次男→ミツル）は母ひとり住む実家に夏休みを利用して里帰りしているが、母は孫のミツルばかりかわいがり、カズキには冷たい態度をとる。昨日は庭にあったじょうろにつまずき母はスイカを落として割ってしまったが、その日じょうろを使っていたのはカズキだった。カズキはしかられたが、カズキ自身はじょうろはたなの上に置いたと言っている。

「今日、帰るから」

僕はきっぱりと言った。「お昼も要らないし、お寺から帰ったら、すぐに支度する」とつづけ、表情を変えない母にもう一言、「今度の正月は、一人でいて」と付け加えた。母は黙っていた。

「このままだったら、カズキがかわいそうだし、あいつ、どうかしちゃうかもしれない。それくらいわかるだろう?」

母は黙ったまま、墓に供えた花の向きを整える。

「一つだけ教えてほしいんだけど……ゆうべのじょうろのこと、あれ、ほんとうだったの? ほんとうに、じょうろはあそこに置いてあったわけ?」

返事はない。

「……カズキに謝ってくれ。いままでのことをぜんぶ謝れとは言わないけど、せめてゆうべのことだけ、おばあちゃんの勘違いだったって、それだけでいいから」

母は、まだなにも答えない。

しばらく沈黙がつづき、もううんざりして——それでも、母を少し一人にしてやっただろうかという気にもなあって、墓所を出て本堂のほうに向かった。

何歩か進んだところで、母の声が聞こえた。

振り向くと、母は墓を見つめたまま、言った。

「墓参りに連れて行ってくれんか」

「え?」

「お父ちゃんとお母ちゃんの墓参り、何年もしとらんし、これでおしまいかもしれんし」^①
実家の墓のことだった。ふるさとの漁村の高台にある。町と海を見渡す眺めのいい場所だが、そこに行くまでの急な階段は、
[1] 後ろから腰を支えてやらないと、いまの母は上れないだろう。

母は「連れて行ってくれんか」ともう一度言っつて、「ほんまに最後じゃけえ」と付け加えた。

僕は黙って腕時計を見た。
[2] 九時半を過ぎていたが、急げば四時間、もっと急げば三時間ぐらいで着くだろう。

「行こうか」

[3] こっちがその気になったのに、そうなると思いに逆「まあ、ほいでも遠いしなあ」「昼から農協ストアに行こう思うとったんじゃけどなあ」「膝が痛うなったらいけんし」と、ぐずぐず言いだす。損な性格だ。カズキに、よく似ている。

「まあいいから、とにかく行こう」

「子どもらはつまらんじゃろ、そげな、墓参りやら」

「おばあちゃんといっしょなら、どこに行くのでも楽しいんだよ、ミツルも、カズキも」

母は「東京の者は口が上手なけん」と言っつて、^②はにかんで笑った。

〈中略〉——車で母のふるさとに向かったが、とちゅうで母とカズキは具合が悪くなり、ドライブインに立ち寄った——

ほとんど背負うようにして母をベンチまで連れていった。車酔いに加えて、右膝も痛いのだという。

二人並んでベンチに座ったカズキと母を見ていると、これ以上のドライブは無理かもしれないな、という気がした。しばらく休んで、お昼を食べて、帰りの山道をできるだけゆっくり走つても、時間がかかると膝にはかえつてよくないだろうか……。

真理はミツルを連れて、冷たい飲み物を買いに売店に向かった。曳き馬の看板を目ざとく見つけて「お馬さんに乗るーっ」と言いだしたミツルの声と、「なに言ってるの、おばあちゃんもお兄ちゃんも具合悪いんだからね」と叱る真理の声が、遠ざかっていく。僕は二人を呼び止めて、「ミツちゃんを馬に乘せてやってくれ」と声をかけた。ミツルはその場でジャンプして喜び、最初は怪訝けげんそうだった真理も、僕が目配せを察して、小さくうなずいた。

僕はベンチに向き直って、母に言った。

「今度はもっと大きな車を借りるから、墓参りはまたにしよう」

母はうなずくでもかぶりを振るでもなく、膝をさすりながら言った。

「遠いのう……」

「うん、やっぱり遠いよ」

「遠いところから嫁よめに来たんじゃなあ、ほんまに、なんのご縁えんがあつたんか知らんけど」

「うん……」

「歩いて帰れんようなどころまで遊びに行ったらいけんていうて、ようお母ちゃんに言われとつたんじゃけどなあ」

「子どもの頃ころ？」

「ずーっと昔のことじゃ。お兄ちゃんやお姉ちゃんらが遊びに行くところにひっついていって、帰りはもう歩けんようになって、おんぶしてもらって帰るんじや。そのの電信柱までじゃけえな、橋まで行ったら歩くんよ、言うてな。健作兄ちゃんやら二郎兄ちゃんやら弥生子やえこ姉ちゃんやら、みんなで順番におんぶしてくれるんじや、うちのことを」

懐なつかしそうちに、遠くをぼんやりと見つめ、「もう、みーんな死んでもうたなあ」と歌うように言う。

「しょうがないさ、末っ子なんだから」

「ほいでも、うちの家系は若死になんかなあ。健作兄ちゃんが七十一、二郎兄ちゃん

が六十五、弥生子姉ちゃんも七十前じゃったもんなあ……八十、九十があたりまえになつとる時代に、早いわなあ」

④ しゃべるにつれて、母の体は少しずつしぼんでいくように見えた。一人暮らしたと、愚痴をこぼすことも、弱音を吐くこともできない。子どもの頃をふと思いだしたときや、新聞の訃報欄を読んだあと、静けさのなかで母はいつもどんな顔をしているのだろうか。

「なあ、ほんまなあ……」

母の声がかズキに向いた。まなざしからは、いつもの険は消えていた。かズキは口元をもごもごと動かし、けれど声は出さずに、肩をすぼめてうつむいてしまう。

「なあ……ほんまなあ……ほんま……」

つづく言葉はため息にまぎれてしまった。まなざしもかズキからはずれ、右膝をさする手の動きが少し速くなった。

「クーラーの効いとるところにおったら、すぐに痛うなる」

つぶやく声に、涙がうつすら交じった。

「ほんまになあ、痛うて痛うて、かなわん……ちぎってしまいたいぐらいなんじゃ、ほんま……」

膝小僧を両手で包み込み、前かがみになって、息を詰めてうめく。

「帰ろう。また今度、連れて行くから、今日はもう無理せずに帰ろう」

「……今度いうて、いつになるんな」

泣きだした。「なあ、いつ連れてつてくれるんな、いつ帰つてくるんな、なあ、約束できるんか？ 約束してくれるんか？」——張り詰めていたものが切れた。

母は声をあげて泣いた。「痛い痛い痛い、ほんまに痛い、痛い痛い痛い！」と子どものように繰り返して、膝を力任せに叩きはじめた。

「ちょっと、お母ちゃん、やめてよ」

あわてて止めようとした、そのとき——かズキが母に抱きついた。おばあちゃんの

膝をかばって、一発、頭の後ろを殴られた。

母はとっさに腕を締め、顔色を変えた。カズキは母の膝を抱きかかえたまま動かない。いや、違う、動いているところが一つだけあった。⑥カズキは母の膝をさすっていた。そっと、小さく円を描くように、カズキの右手はおばあちゃんの膝をさすっていたのだった。

母は背筋を伸ばして、そっぽを向いた。唇を真一文字に閉じて顎をツンと持ち上げて、涙の残る目で遠くをにらみつけた。だらんとたるんで皺だらけの喉が、ひくひくと動く。煙たそうな瞬きをするたびに、鼻の頭が赤くなる。

カズキはまだ起き上がらない。体をおばあちゃんに預けて、一心に膝をさすりつづける。

「やっぱり……がんばって、海まで行こうか」

僕はうつむいて言った。母のふるさとは小さな漁村だが、海岸線に沿って少し走れば海水浴場がある。民宿の一軒ぐらい見つかるだろうし、部屋が空いていなければ、そのときは、そのときだ。

母は返事の代わりに、右手をカズキの背中に置いた。ゆっくりと、拍子をとるように、背中を叩く。子どもの頃、怖い夢を見て真夜中に目を覚ました僕を寝かしつけるとき、母はよくそうしてくれた。ささやくように子守歌を歌って、僕が寝入ってしまうまで、ずっとそばにいてくれた。遠い、遠い、昔の話だ。

助手席のシートをいっぱいに後ろに下げて、母を座らせた。エアコンを切って、膝にはカズキのタオルケットを掛けた。自分のタオルケットをおばあちゃんに使ってもらえなかったミツルはご機嫌斜めだったが、子どもなりに察するところはあるのだろう。「お兄ちゃんのタオルケット、さらさらしてて気持ちいいんだよ」と言っ、おばあちゃんよりもむしろ真理を

A。

おばあちゃんの後ろはミツル、真ん中に真理。僕の後ろに座るはずのカズキは、車

のそばに立ったまま、なかなか乗り込もうとしない。

「どうした？」

いったん運転席に座った僕は、ドアを開けてカズキに声をかけた。

「うん……ちよつと……いい？」

また、しょんぼりした顔になっている。僕は車を降りて、「どうしたんだよ」と笑いながら、カズキを追ってトランクのほうにまわった。

「酔い止め、新しいの服のんだんだろ？」

「うん、だいじょうぶだけど、それは」

「ゆつくり運転してやるから。しばらくはカーブが多いけど、途中とちゅうからはまっすぐになって、あとはもう海まで一本道だから」

「うん……」

「おばあちゃん喜んでたぞ、さつき。パパもすごく嬉うれしかった、さすがカズだなあつて思つて」

その言葉に、カズキの顔はいつそう悲しげになった。うつむいて、唇をとがらせて、いまにも泣きだしそうに眉まゆが動く。

「……おばあちゃんの足、いつから痛いのか？」

「うん？」

「ゆうべ、スイカ落としちゃったから？ それで膝が痛くなっちゃったの？」

そんなことないけど——と言いかけて、ピンと来た。^⑦驚おどろいて、そういうことかと納得なっとくして、怒いかりはしない、悲しくもならない、思わず「ハハッ」と笑もいが漏れた。

カズキは半べその声でなにか言おうとした。それをさえぎって、肩に手を載のせ、ポーン、と叩いてやった。

「長生きしてるからだよ。ずーっと歩いてきたんだから、足だって痛くなるし、あつちこつち痛くなるんだ」

カズキは黙って肩をすぼめた。

（重松清「海まで」）

問一 —— 線①について、何が「おしまい」なのか、次から選び、記号で答えて下さい。

ア、自分の命

イ、自分の両親の墓参り

ウ、「僕」の里帰り

エ、ふるさとの海をながめること

問二 空らん 1 3 に入る言葉を次から選び、記号で答えて下さい。

ア、すでに イ、せっかく ウ、まるで エ、たぶん

問三 —— 線②はどのように笑うことか、次から選び、記号で答えて下さい。

ア、はずかしがって笑うこと

イ、歯ぎしりをして笑うこと

ウ、苦笑いすること

エ、歯をむき出しにして笑うこと

問四 —— 線③とあるが、真理は「僕の目配せ」にはどのような意味が含まれていると感じましたか。次の中から二つ選び、記号で答えて下さい。

ア、ミツルは一度言い出したら聞かないので、思い通りにやらせてあげたい。

イ、母とカズキの具合が悪いので、元気すぎるミツルを離しておきたい。

ウ、母とカズキの体調がもどるまで少しでも時間をとりたい。

エ、母とカズキは今ミツルをさけているので、接触をさせたくない。

問五 —— 線④とあるが、その様子の説明としてふさわしいものを次から一つ選び、記号で答えて下さい。

- ア、しゃべりながら母は上体が前かがみになり、表情が暗くなっている。
- イ、老いからくるさびしさをしみじみと感じ、元気がなくなっている。
- ウ、兄妹の死をふりかえり、悲しみのために顔にしわが寄っている。
- エ、しゃべる声がだんだんと小さくなり、それが悲しみの様子を表している。

問六 —— 線⑤の「張り詰めていた」母の気持ちとはどのようなものか、次から一つ選び、記号で答えて下さい。

- ア、膝が痛くてたまらず、「また今度連れて行く」という安うけ合いをする息子に対して不安がつっている。
- イ、ドライブの最中ずっと膝の痛みをこらえていたので、何に対しても怒りを感じずにいられない。
- ウ、いつ死ぬかもわからず、膝の痛みも増し、何とかして実家の墓参りを息子がいるうちに果たしたい。
- エ、カズキがまともに相手をしてくれないので、カズキのいたずらを自分のせいとされた怒りが高まっている。

問七 —— 線⑥のカズキの気持ちを自分のことばで説明して下さい。

問八 空らん A に入ることばを次から一つ選び、記号で答えて下さい。

ア、心配させた イ、なぐさめた ウ、困らせた エ、喜ばせた

問九 —— 線⑦の僕の気持ちの説明として正しいものを次から一つ選び、記号で答えて下さい。

ア、母とカズキの不仲の原因がカズキの勘違いだと気づき、これからの二人が仲直りすることを期待している。

イ、ドライブをきっかけにして母に対して気づかう気持ちがカズキに生まれ、今までの行動を許す気になり、気持ちが楽になっている。

ウ、母の膝が痛くなった原因を昨日のスイカの件に結びつけているカズキに対し、その無邪むじや気さをほほえましく感じている。

エ、ここで初めてじょうろの件はカズキのしわざだとわかったが、母を心配する気持ちを自ら表現したので責める気持ちにもならない。